不易流行論に立つ学習指導の可能性

千葉大学教育学部附属小学校
大木　圭

一　昔話を「知ったつもり」の児童

「ちがう！」昔話絵本を読み聞かせると、決まって児童はこんな不平を言う。一年生に「桃太郎」の絵本を読み聞かせた時も、やはり自分の知っている桃太郎とは、内容も絵も違うと言う。しかも「鬼が島に鬼は二人もいなかったはず」など、話の筋とは無関係な箇所を指摘する有り様である。これは、口承文芸であったはずの昔話が、絵本やビデオで伝えられている現代ならではの姿といっていい。

学習指導要領及び解説書は、「伝統的な言語文化」について、各学年で扱う教材だけでなく、それをどう指導するかまで示している。たとえば、低学年であれば「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」と書いては、ある。

しかし、実際には、どんな昔話を選定し、どのように読み聞かせたらよいのだろうか。

二　「古典嫌い」の高校生

四年制の大学に通う学生を対象にして、高校時代の教科の好き嫌いに関するアンケート結果（注1）がある。これによると、残念ながら、高校時代を振り返って古典が「好きだった」と答えた割合は全科目中、最下位であった。

実際、中学校や高校で行われている古典学習の実践は、このいわゆる「古典嫌い」という実態を踏まえて報告されていることが多い。古典を嫌う理由としては、「将来役に立ちそうもない」「歴史的仮名遣いが読みにくい」「文法が難しい」等が挙げられている。

今回の改訂により、高学年では「親しみやすい古文・漢文を音読すること」になったが、この実態を鑑みると、小学校の責任は大きい。

昔話同様、中学以降の古典学習の充実のためにも、どのような古文・漢文を選定し、どのように親しませたらよいのだろうか。

三　芭蕉の「不易流行」に学ぶ

ところで、何かの変化・変革が起ころうとする時、必ずといっていいほど、「不易流行」という言葉を持ち出す方がおられる。そして、たいてい「流行に目移りすることなく、不易にこそ目を向け、大切にせよ」と結ぶ。

しかし、本来、不易流行とは、松尾芭蕉の俳諧理念を示す語であり、右の懐古主義者らの主張に軽々に使われるような言葉ではない。本当の意味は、もっと深い。『俳諧大辞典』によれば、「俳諧は新しみをもって生命とする、そのつねに新しみを求めて変化を重ねていく流行性こそ、俳諧の不易の本質（注2）」とある。

また、同時に、「流行は単なる変化にとどまるものではなく、つねに永遠の価値の実現を目指してなされなければならぬ、そして、逆に俳諧の永遠の価値はマンネリズムを排し新しさを求める不断の努力の中からこそ生まれ得る（注3）」という実践的意義をも示唆している。

ここには、「伝統的な言語文化」の指導の要が集約されているように思う。すなわち、私たちが選定した教材を「不易」のものと崇め奉るのではなく、現代を生きる児童なりに享受させていくことが、真の継承・発展につながるのではないだろうか。「伝統的な言語文化」の指導は、単なる懐古趣味ではない。

四　指導の実際―昔話・漢文の指導

では、どんな指導が考えられるだろうか。まず、昔話の持つ特徴から想定した、昔話に親しむ児童の三つの姿を踏まえて、一年生で行った昔話に関する二つの実践の概要を示す。

①昔話の持つ大らかさに気づく姿

昔話は、口承文芸であるが故に、時代や語り手によって、様々な再話がなされてきた。同じ昔話「桃太郎」でも、「どんぶらこ」と流れてくる桃もあれば、「つんぶくかんぶくつっこんこ」と流れてくる桃もある。こうした広がりを昔話の大らかさとして捉えさせたい。

②「昔話らしさ」に気づき、活用する姿

昔話は、たとえば、「むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」など、聞き手の頭に絵が描けるように、「いつ」「どこで」「誰が」「どうした」という情報が、初めに一気に語られる話である。目で読む文学作品とは違った特徴を踏まえ、再話させたい。

③様々な昔話を知り、それを伝え合う姿

一口に昔話といっても、様々な種類がある。「桃太郎」のように勧善懲悪型の話もあれば、「鶴の恩返し」のように報恩譚と呼ばれる話もある。また、同じ報恩譚であっても、婚姻譚や致富譚に展開するものなど様々である。こうした昔話に年間を通じて触れさせたい。

これを踏まえ、六種類の昔話絵本「桃太郎」を読み聞かせることから始めた実践（七月）と、百余話の昔話を読み聞かせてから、かるたづくりをするという実践（二月）を行った。児童が昔話絵本を読み比べ、自分なりに再話した桃太郎話を幼稚園児に語り聞かせたり、「昔話かるた」の読み札をつくるために昔話の内容に合う言葉を吟味し合ったりする姿は、受け身ではなく、一年生なりの言葉で昔話を語り継ごうとする伝え手としての姿であった。

では、漢文の指導は、どうしたらよいか。昔話の実践と同様、漢文に親しむ児童として、次の姿を想定し、五年生で漢詩の訳詩づくり等に取り組ませた実践の概要を示す。

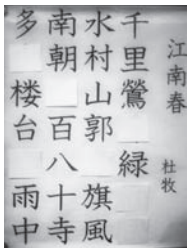
〔漢文に親しむ児童の姿〕―目指す児童像

①白文を自分の知っている漢字などから、何が書かれているかを読もうとする態度
②白文を書き下したり、音読したりする姿
③漢字の意味等を手がかりに、内容を自分なりに想像する姿

〔一時間の授業の流れと様子〕―三時間扱い

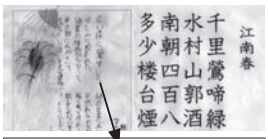
①漢詩（白文）に出合い、感想の交流
②段階的に文字を消しながら音読（暗唱へ）
③それぞれが訳詩等をつくり、交流
④訳詩を踏まえ、再度音読
※原則として、毎時間の学習過程は同じ
※「江南春」→「春夜」→「春暁」

・段階的に文字を消しながら音読させた板書



こうすると、暗唱してしまう児童も現れるが、あくまでもそれが目的ではない。

・児童のつくった訳詩等



広い森に鶯啼いた
　緑の若葉に赤い花
川と山に囲まれた
　自然あふれる村々は
酒屋の旗がひらひらと
　風に乗ってゆれている
南の朝にかがやいて
　数え切れない寺寺が
やぐらという遠くを見る建物から
　きりにまざってきれいに見えた

メディアが発達する現代を生きる子ども達と古典教材がどのような化学変化を起こしていくのか、それを支える指導のあり方の摸索が、不易流行論の本質である。

注

1　平成十七年度経済産業省委託調査「進路選択に関する振返り調査―大学生を対象として」
2　『俳諧大辞典』（明治書院、一九五七年、p.672）
3　同書（p.673）

おおき　きよし　千葉大学教育学部附属小学校教諭

平成二十二年二月四・五日の公開研究会で、伝統的な言語文化の指導に関する提案をさせていただきます。